

アニマルウェルフェアなんてやっつけられない！？ (4)

岩手大学名誉教授 岡田啓司

【日本畜産の二つの流れ・・・あなたならどうする？】

現代日本の畜産の象徴である酪農には、明瞭に二つの方向性がある。一つは効率化を追求する今までの流れ、すなわち、限られた面積で生産効率を上げるための高泌乳路線である。その努力の賜として、牛の個体乳量は世界 3 位まで伸びた。昭和 51 年に比べると乳量は実に 1.5 倍に増えている。産乳成績を伸ばすためにルーメンを大きくしなければならず、牛も大きくなった。そのために牛舎が相対的に小さくなり、牛舎を建て替えなければならなくなった。立て替え時には規模拡大が伴った。“大きいことはいいことだ！”の高度経済成長時代を酪農は未だに引きずっている。産乳成績向上に伴い輸入飼料への依存はさらに大きくなり、増加した糞尿のために自家産粗飼料の硝酸体窒素濃度は上昇した。大規模化は機械化を伴い、目の前を通り過ぎる金は大きくなったけれど借金は減らない。これ以上の大規模化は無理だ、というときに貿易自由化による乳価下落の予想が出てくる（臨床獣医 2008 年 8 号参照）。牛個体の乳量に対応する飼料設計ができない。ルーメンアシドーシスになるぎりぎり、あるいはそれ以上のデンプンを与え、反芻動物には無用の脂肪やルーメンバイパス蛋白や添加剤を与え、飼料代は増加したにもかかわらず分娩後の負のエネルギーバランスの期間は延長し、代謝病は減らず、繁殖成績は悪化の一途をたどっている。しかし改良の最先端の農場ではさらなる高泌乳大型化が進行している。それについていけない中小農家の淘汰も進行している。大規模化に伴い牛 1 頭の価値は下落し、手間暇の問題も含めて、疾病罹患牛は淘汰する方向が生まれている。

もう一つの流れは放牧である。窒素循環を考えた場合、ヨーロッパのように草地面積あたりの飼養頭数を制限することで循環型酪農に少しは近づける。放牧酪農は既存の一元集荷体制に組み込まれてしまうと、規模や生産効率の点から大規模畜産にはかなわない。そこで進む方向として、健康で環境に優しい飼い方で育てられた安全で美味しい畜産物、という高付加価値商品として展開せざるを得ない。そのときに消費者が嫌う抗生物質やホルモン剤を極力使用しなくても済むような飼養管理が必要になる。

前者は完成されたシステムであり、現在の主流である。農家が後者に転換す

るには多くの制約と難関がある(臨床獣医 2008 年 8 号参照)。いずれにしても、この二つの流れの対応する臨床獣医療として生産獣医療の重要性は高くなっていく。

臨床獣医 2009 年 10 月号掲載原稿を一部改編